福岡大学人文論叢　第56巻　第1号，127-160p（2024.6）　論　説

専門学校教員の参入過程に関する検討

― 専門学校卒教員に焦点を当てて ―

佐　藤　昭　宏*
植　上　一　希**
丹　田　桂　太***

1．問いと課題の設定

(1) 問いとその背景

急速な18歳人口の減少や地域ごとの高等教育機関を取り巻く環境変化に伴い、高等教育のあるべき姿や役割の再検討が進むなか、専修学校専門課程（以下、専門学校）は、地域産業を担う専門人材育成機関としての役割が期待されている（中央教育審議会，2023）。文部科学省は、専門学校の職業教育の好事例の普及や、職業教育ならではの体験・経験を通じた学びの魅力発信の強化に取り組むなど（三菱総合研究所，2020）、専門学校の教育内容は徐々に可視化されつつある。一方で、職業教育機能を生かした教育がどのような専門性や経験をもった人たちにより支えられているのか、専門学校教員の実態は十分に明らかにされていない。

文部科学省が定期的に実施している学校教員統計調査（令和元年）によれば、専門学校教員の本務教員の平均勤務年数は10.3年と、小学校教員や中学校教

*　ベネッセ教育総合研究所主任研究員
**　福岡大学人文学部教授
***　大分大学IRセンター助教

員、高等学校教員と比して短い（小学校教員 16.9 年、中学校教員 17.5 年、高等学校教員 18.3 年）。全職員のうち勤務年数が「5 年未満」の教員が全体の 38.5％を占めており、小学校や中学校、高等学校の教員の同比率（小学校教員 21.3％、中学校教員 20.3％、高等学校教員 19.3％）と比べ大きな違いがある。この傾向は、直近 20 年間のデータをみても一貫している。こうした平均勤務年数の短さは、専門学校が社会変化に柔軟に対応した教育課程編成や教員配置を行う上での一種の特徴として捉えることができる一方、他の学校種よりも、継続的なキャリア形成が難しい職業であるという見方もできるだろう。

専門学校教員には、初等中等教育の教員のように、誰もが教職課程を経て教員になるといった共通の入職過程が存在しない。したがって教員としての参入や適応にあたりより一層、個に応じたキャリア形成支援が必要である。しかしながら、専門学校教員としての基本的なキャリア形成の実態すら十分に把握できていない現状がある。そこで本稿では、「誰が、いつ、どのような理由で専門学校教員として参入しているのか」という問いを設定し、専門学校教員を対象としたインタビュー調査のデータを基に、入職にあたっての意思決定プロセスに関する仮説生成を目的とした探索的分析と考察を行う。

(2) 先行研究の検討

専門学校教員のキャリア形成に言及した先行研究としては、「高等教育と学位・資格研究会」による『高等教育における教員と教育組織に関する調査』(2012) がある。この調査は、短期大学教員と専門学校教員を「非大学型高等教育教員」として捉え、教育組織の現状や職能、学習・職業経験を軸とした教員の特徴把握および類型化を試みている。その中で「学術型教員」「職業型教員」「学術・職業デュアル型教員」の 3 つの教員タイプが提示されているが、短期大学教員を含めた対象の一部であったこともあり、専門学校教員は、最終的にどの類型にも該当しない「その他教員」が多くを占めているという結論に

留まっている。

こうしたなか、植上・佐藤・丹田（2023）は、三菱総合研究所が実施した専門学校教員 5,722 名を対象とした調査データの分析を通じ、専門学校教員のキャリア形成について参入前学歴および職歴を軸に特徴把握を試みている。植上らの研究の重要な指摘としては、①参入前学歴（最終学歴）は、専門学校卒（大卒学歴を含まない）・大卒（専門卒学歴を含まない）・その他（専門卒かつ大卒、短大卒、大学院卒等）の 3 タイプに分類でき、それぞれ約 3 分の 1 ずつであること、②専門学校卒教員の約 4 分の 3 が母校出身の教員であること、③専門学校教員の約 9 割が参入前に何らかの職歴を有していること、④職歴期間が多様であること、の 4 点があげられる。加えて植上らは、量的調査と併行して質的調査を実施し、母校に勤める教員の多くが、入職にあたって母校からの働きかけを受けていることや、専門学校教員の前職が同一業界のみならず、複数の業界にわたることなどの特徴も明らかにしている。また専門学校教員を取り巻く制度・環境面からキャリア形成の特徴把握を試みた研究として植上・瀧本（2017）があり、教員養成課程の不在や職務規程の未整備、学校規模に応じた研修制度の整備状況の差異、職業分野によって求められる教員の資質能力の幅広さが、専門学校教員のキャリア形成の多様さにつながっている可能性を指摘している。

このように専門学校教員のキャリア形成を捉える上での基礎的実態は少しずつ明らかにされているが、「いつ」「どのように」専門学校教員として参入するに至ったのか、そのプロセスは十分に明らかにされていない。学校種は異なるが、小学校教員および中学校教員の参入過程については、学生が教職を志望するに至った動機に焦点を当てた研究があり、高校時代までに接してきた教師の影響や人に教えることの喜びや楽しさを体験したこと、教育実習の体験などが教職への志望を高める要因になっていることが明らかにされている（中山 2007, 国眼・松下 2000 など）。しかしながら専門学校教員については、教員に

『なる』に至るプロセスや動機について十分な検討がなされた研究はほとんどみられない。

本稿が目指すのは、先行研究が示してきた初等中等教育の教員の参入過程の特徴や、初等中等教育の教員と専門学校教員が置かれている制度や環境面（マクロレベル）の違いをふまえた上で、よりミクロな専門学校教員の参入過程に関する知見を蓄積することである。具体的にどのような契機が専門学校教員に『なる』という選択肢として浮上させ、実際に専門学校教員として参入するに至ったのか、そのプロセスを明らかにすることで、前述の植上・佐藤・丹田（2023）の研究に対してさらなる知見を蓄積し、より丁寧に専門学校教員の多様性やその実態を描くことができると考える。

(3) 課題の設定

以上の先行研究の検討をふまえ、(1) で示した問いに対する課題として、本稿が設定する課題は以下の 2 点である。

1 点目は、「専門学校卒教員」の参入プロセスのありようを検討時期に焦点を当て、現状を明らかにすることである。専門学校教員に『なる』上での明確な採用・養成プロセスが存在しないからこそ、彼ら/彼女らのなかで、「いつ専門学校教員が職業の選択肢として浮上したのか」、その時期を把握することは、今後の採用や養成のあり方の検討において重要な情報となる。

2 点目は、「何が専門学校教員に『なる』上で後押しになったのか」を、意思決定の要素という観点から明らかにするという課題である。教職という仕事の内容や学校という組織への適応を新たに求められる環境は「組織での仕事・組織に所属することについての期待・現実感のギャップ」(Schein 1978) や「組織参入前に抱く仕事上の期待と組織の一員となってからの経験との不一致」(Dean, Ferris and Konstans 1988) が生じやすい状況といえる。したがって、専門学校教員としての参入にあたっての意思決定の状況を把握しておくこと

は、参入時のフォローや参入後の効果的な成長支援を検討するうえで重要な情報となり得る。

(4) 調査方法・使用データ

この検討時期や意思決定の要素に関わる課題の検討にあたって、本稿では植上らが令和５年までに実施してきた「専門学校教員のキャリア形成過程の類型化に関するインタビュー調査」（以下、「専門学校教員キャリア調査」とする）から得られた35名の語りを使用する。本調査の概要は以下の通りである（表1）。

＜表１　専門学校教員キャリア調査の概要＞

調査件名	専門学校教員のキャリア形成過程の類型化に関するインタビュー調査
調査方法	インタビュー調査（一部オンライン）、半構造化インタビュー
調査項目	基礎情報（学科名など）、経歴（学歴・職歴など）、専門学校教員になった理由・契機、担当授業・校務分掌、必要な資質能力と業務の中で感じる困難、今後のキャリアプランなど
調査期間	令和元年～令和５年
調査対象および抽出法	一般社団法人全国専門学校教育研究会ならびに一般社団法人福岡県専修学校各種学校協会の知人の紹介や機縁法により条件に合致する調査対象者に協力依頼、承諾を得た専門学校教員 35 名（専任教員）に対して調査を実施した（非確率抽出法）。

以降の分析では、この専門学校教員 35 名を参入前学歴（最終学歴）が専門卒（大卒等学歴を含まない）の「専門学校卒教員」（16 名）と、それ以外の「非専門学校卒教員」（19 名）とに分類する。その上で、本稿では専門学校卒教員（16 名）に焦点を当て、専門学校教員という仕事が選択肢として浮上した時期や、参入に至った意思決定のプロセスを検討する。対象を専門学校卒教員に限定したのは、先行調査（三菱総合研究所, 2023）において、専門学校教員の３分の１が専門学校卒の教員であること、また専門学校卒教員の約 75％は母校出身であることなど、他の学歴をもつ専門学校教員とは異なるキャリア形成の

特徴を有する可能性があるからである。次節では、今回の調査対象となった専門学校卒教員 16 名の学歴や職歴などの属性確認を行う。

2．参入と関連職歴・転職経験の有無

課題の検討に先立ち、問いで掲げた「誰が参入しているか」を確認する上で、対象者の参入前学歴・職歴の概要を整理しておこう。

表 2 は、植上ほか（2023）で明らかにされた「専門学校卒教員」と参入前の関連職歴の有無、同業界転職、異業界転職経験の有無の関係を整理したものである。なお、表中の「調査番号」は上記の植上ほか（2023）に基づいている。

＜表 2　分析対象の「専門学校卒教員」16 名の関連職歴に関する概要＞

調査番号	分野	学科	参入前学歴・職歴の概要	関連職歴	同業界転職、異業界転職経験の有無
①	工業	情報処理	情報系専門学校卒業後、そのまま母校に就職。電算機センター職員のち、教員に。	×	×
②	工業	情報処理	情報系専門学校卒業後、民間企業でプログラマー（3 年）として働き、誘いがあり母校に。電算機センター職員を経て教員に。	○	同業界
③	工業	情報処理	情報系専門学校卒業後、民間企業でプログラマー（3 年間）として働き、情報系専門学校（3 年）⇒経理系専門学校（5 年）⇒現在の学校。すべて非母校。	○	同業界 ＋ 教員経験
⑦	工業	自動車整備	自動車整備系専門学校卒業後、民間企業で整備士（5 年）⇒自動車工場（1 年）を経て、母校に就職。	○	同業界
⑩	衛生	調理	調理系専門学校卒業後、複数のレストラン（海外含む）勤務を経てレストラン経営（20 年）。閉店後、開業時から 18 年間特別講師をしていた学校に教員として就職。	○	同業界
⑪	衛生	美容	美容系専門学校卒業後、民間企業で美容部員（10 年）。その後、美容とは無関係の職場（4 年）で働いたのち、誘いを受けて母校に就職。	○	同業界 ＋ 異業界
⑫	衛生	美容	美容系専門学校卒業後、ブライダル系企業（半年）⇒アパレル系企業（半年）を経て、誘いを受けて母校に就職。	△	同業界

⑮	商業実務	エアライン	短期大学を中途退学し、エアライン系専門学校を卒業。航空系企業でグランドスタッフ（6年）⇒県庁（半年）を経て、専門学校（非母校）に就職。	○	同業界
⑯	商業実務	エアポート	エアポート系専門学校卒業後、航空系企業でハンドリングスタッフ（4年半）勤務。その後、空港関係（半年）勤務を経て、以前から誘いがあった母校に就職。	○	同業界
⑰	商業実務	ホテル	ホテル系専門学校卒業後、2つのホテル勤務（2年半⇒2年）と、飲食系でのパート（4年）を経て、誘いを受けて母校に。	○	同業界＋異業界
⑲	商業実務	ブライダル	旅行系専門学校卒業後、3つのホテル（5年⇒3年⇒7年）で主にブライダルプランナーとして勤務。退職後、募集を見つけて、現在の学校（非母校）に就職。	○	同業界
⑳	商業実務	医療事務	医療事務系専門学校卒業後、病院で医療事務（1年）を経て、誘いを受けて母校に就職。	△	同業界
㉑	商業実務	医療事務	医療事務系専門学校卒業後、薬局で医療事務（4年）を経て、誘いを受けて母校に就職。	○	同業界
㉒	商業実務	医療事務	医療事務系専門学校卒業後、3つの病院で医療事務（計8年）として勤務。誘いを受けて母校に就職。	○	同業界
㉓	文化・教養	動物	動物系専門学校卒業後、ホームセンターでペット部門勤務（2年）。誘いを受けて母校に助手として就職⇒教員に。	△	同業界
㉔	文化・教養	法律行政	ビジネス系専門学校卒業後、書店勤務（3年）、酒屋勤務（2年）、ワーキングホリデー（1年）を経て、母校の教員（3年）に。その後、現在の学校（非母校）にうつる。	○	同業界＋異業界＋教員経験

以上の表2の整理から確認できることは以下の2点である。

第1に、専門学校卒教員の参入の特徴を職歴の観点からとらえたとき、「a. 同業界の関連職歴を経ず新規学卒で参入」、「b. 同業界の関連職歴を経て参入」、「c. 同業界の関連職歴に加え、異業界の職歴を経て参入」の3つの参入タイプが存在し、「a. 同業界の関連職歴を経ず新規学卒で参入」した教員はごく少数に留まっている。

第2に、「b. 同業界の関連職歴を経て参入」、「c. 同業界の関連職歴に加え、異業界の職歴を経て参入」した教員の職歴の長さは、一様ではない。比較的短

期間の関連職歴を経て、キャリア初期に専門学校教員として参入している教員もいれば、同業界、異業界での複数の職歴を経て、キャリア中期に「キャリアシフト」（これまでのキャリアと類似性がある仕事に過去の経験を活かしながら新しい領域に挑戦すること）や「キャリアチェンジ」（全く未経験の仕事に挑戦すること）の目的で専門学校に参入している教員も存在する。

次章以降では、これらの参入タイプをふまえながら、①いつ専門学校教員に『なる』選択肢が浮上したのか、その検討時期と、②最終的に専門学校教員に『なる』決定を支えた意思決定の要素を確認していく。

3．専門学校教員キャリアへの参入を検討した時期

(1) 専門学校教員に『なる』選択肢の検討時期の概要

3章では、1つ目の課題である「いつ、専門学校教員が具体的な職業の選択肢として検討されるようになったのか」について、16名の教員の語りを中心に検討していく。

下記の表3は、本稿の対象者である16名が、専門学校教員を職業の選択肢として検討した時期をまとめたものである。ここでは検討時期を「入学前」（専門学校に学生として入学する前から）、「在学中」（専門学校生として在学していた当時）、「卒業後」（専門学校卒業後、さまざま職業経歴を積み重ねていた期間。入職直前の転職活動を除く）、「入職直前」（入職直前の転職活動中）の4つに区分し、整理を試みた。

＜表3　専門学校教員に『なる』選択肢の検討時期＞

調査番号	分野[i]	学科	性別	専門学校教員に『なる』選択肢を検討した時期（入学前/在学中/卒業後/入職直前）
①	工業	情報処理	男性	在学中
②	工業	情報処理	女性	入職直前
③	工業	情報処理	男性	入職直前
⑦	工業	自動車整備	男性	在学中

⑩	衛生	調理	男性	卒業後
⑪	衛生	美容	女性	入職直前
⑫	衛生	美容	女性	入職直前
⑮	商業実務	エアライン	女性	入職直前
⑯	商業実務	エアポート	男性	卒業後
⑰	商業実務	ホテル	女性	入職直前
⑲	商業実務	ブライダル	女性	入職直前
⑳	商業実務	医療事務	男性	入職直前
㉑	商業実務	医療事務	男性	入職直前
㉒	商業実務	医療事務	女性	卒業後
㉓	文化・教養	動物	男性	在学中
㉔	文化・教養	法律行政	男性	入職直前

検討時期の内訳をみると、在学中に専門学校教員になることを検討していた教員が3名（①⑦㉓）、卒業後（入職直前を除く）に検討をしていた教員が3名（⑩⑯㉒）、入職直前が10名（②③⑪⑫⑮⑰⑲⑳㉑㉔）であった。専門学校に入学する前から専門学校教員になることを検討していた教員はいなかった。最も早いタイミングでも在学中の検討であり、専門学校卒教員の多くは卒業後に検討している様子がうかがえる。

1章では、初等中等教育の教員のキャリア形成との違いとして明確な養成課程の不在など、制度面の支援の脆弱さについて言及したが、高卒時点で教員になることを目指して専門学校に進学した者は存在しなかった点など、教員に『なる』ための計画的な準備や見通しという面で、他の学校種の教員とは大きく異なっている。

(2) 検討時期に関するケースの検討

次に、具体的な語りをもとに、検討時期についてのイメージをより明確にしていこう。以下、「在学中」、「卒業後」、「入職直前」に分けて、それぞれの典型的なケースを検討していく。

(2)-1「在学中」に専門学校教員への参入を検討していたケース

(1) で確認したように、専門学校在学中から専門学校教員になることを検討したのは教員①・⑦・㉓の3名である。

そのなかで、教員⑦と㉓は、入学後に出会った教員へのあこがれをもとに、在学中から専門学校教員になることを選択肢として持っていたという。その点について語った教員㉓の語りを見てみよう。

教員㉓：好きな動物のことを人に伝えて、それで先生ってすごい偉大だったんですね。1年次の先生も、聞いたら何でも答えてくれる先生で、動物のことだけじゃなくていろんなことも知ってたので、かっこいいな、すごいなって思って。(略) 接していくと、僕もおしゃべりが好きだったので、動物のこととかでおしゃべりしてるとすごい楽しいんですね。これが仕事になるってすごい楽しそうだなと思って (略)。2年生ぐらいからちょくちょく隙あらば「先生になるからね」みたいな感じで。

このように、専門学校在学中から、専門学校教員になるという選択肢を主体的に持つようになるケースがあることは確認しておきたい。

他方、専門学校卒業後、他の職を経ずにそのまま専門学校教員になった唯一の事例である教員①の経緯についても見ておこう。教員①は就職活動で内定を得るも勤務先が地方であることがわかり、地元で家族を支えていくために教員として学校に残る道を学校に持ち掛けたところ、そのまま教員として採用されることになったという。

教員①：親父たちが (地方での就職に) すごい反対してたんで「辞退します」って言ってやめたんですね。それが10月だったので、じゃあ、これから就職活動どうしようかなみたいな。(略) そのときに、当時、私が入学し

たときの学科の科長さんだった人が、私が２年生になったときに、情報処理分野の部長さんに昇格してたんですね。たまたま下に居たら、その人が、「どうしたんだ、おまえ、就職は」と言うから、「実はこうこうこうで」、冗談半分に、「私、学校に残れませんかね」って言ったら、「それ本気？」とかって言って、「まあ半分は。教えるのも好きですし」って言ったら、「じゃあ、動いてみるか」みたいなかたちで、それで受けたみたいな。だから、私は、卒業と同時にここに就職なんです。

植上：なるほど。「私、学校に残れませんか」で就職ですか。

教員①：教えるのも好きだしなみたいな。友達に教えてたっていうのもあっそういうのも面白いかなみたいな。

植上：就職活動をされてたときから、専門学校の教員というのは選択肢にあったんですか、それとも・・・。

教員①：ないです。全くないです。

専門学校教員のほとんどは表２で整理したように卒業後、一度、関連業界に就職してから母校に教員として戻るケースが多く、教員①のような新卒ストレートでの専門学校教員採用は珍しい。ただ、この例外的なケースにおいても、専門学校教員になるという選択肢は、教員自身が主体的に浮かび上がらせたというよりも、いくつかの偶然のなかで浮かび上がってきたものといえるだろう。このような選択肢の偶発的な浮上は、次項以降で検討するケースに類似するものである。

(2)-2「卒業後」に専門学校教員への参入という選択肢が浮上したケース

では、専門学校卒業後に教員に『なる』選択肢が出現した教員についてはどうだろうか。(1) で記したように、専門学校卒業後から、専門学校教員になるまでの経歴は多様であるが、大きく、「卒業後」と「入職直前」にわけること

ができる。ここでは、前者（⑩⑯㉒）について検討していく。

まずは、教員⑩のケースを見てみよう。教員⑩は調理系専門学校卒業後、複数のレストラン（海外含む）勤務を経てレストラン経営に20年携わり、その後、開業時から18年間特別講師をしていた学校に教員として就職したケースである。

教員⑩：以前から（専門学校教員に）興味は持ってたんです。人に教えるというか、教育をするということ、この業界に。今まで作って、お客さんに出して、利益を上げて、運営をしていくということしかしていなかったので、人に教えて人を育てる。正直そこまでの余裕がなかなか現場になかったというのがあって、そういった面で自分の経過年数もあるんですけど、教育というか、この業界の一部として、人を教育して、業界を盛り上げるということをやってみたいなという感じでしたね。（略）

植上：ここの学校の特別講師で18年間やられていたということもあって（そのなかで専門学校員になるというのが選択肢にあがった—筆者注）。

教員⑩：そうですね。

教員⑩は、卒業後の長いキャリアのなかで、特別講師を含む様々な経験を積み、中期的なキャリアプランとして専門学校教員になるという選択肢が徐々に浮上したケースである。キャリアの長さは異なるが、教員⑯も、卒業後に、複数回にわたり母校から専門学校教員になることの誘いを受けるなかで専門学校教員になるという選択肢が形成されている。本調査では2名に過ぎないが、卒業後のキャリアのなかで少しずつ、専門学校教員という選択肢を形成していくタイプは一定数存在すると推測される。

他方、教員⑩や⑯と比較すると、教員㉒の場合は、選択肢は形成していったというよりも、偶発的に浮上してきたととらえたほうが良いかもしれない。こ

のケースについても見ておこう。

教員㉒は高校卒業後、専門学校の医療事務系の学科へ進学。兄弟が医療事務職についていたこともあり、自身も３つの職場を経験して（いずれも「良い環境」）、その後、専門学校教員へ転身している。その経緯についての語りが以下である。

教員㉒：25、6歳のときに、急に時間を持て余してしまったというか、もうちょっとばりばり働きたいと思うようになって（笑）。で、たまたまなんですけど、今の専門学校の求人見つけて教員っていう仕事が面白そうだなと思っていたときに、専門学校時代の先生と食事する機会があって。話をしたところ、そういった現場経験生かすこと、医療事務の仕事だけじゃなくて、医療事務を生かした教員っていう仕事もあるよっていう話をいただいて、急に専門学校の先生になりたいと（笑）。医療事務に対して未練もなく専門学校の教員を目指しました。

教員⑩と比較した場合、教員⑩が「教えること」への想いから、専門学校教員になるという選択肢を形成してきたのに対し、教員㉒の場合はかなり偶発的に選択肢が形成されたことがわかる。教員㉒は前職の仕事に対する「物足りなさ」を感じていたところに、求人によって今の仕事の経験を活かしながら活躍できる道として教員という選択肢を知り、興味関心が急浮上し、そこに母校教員の誘いが重なったことで、専門学校教員としての入職を決定している。

こうした複数の要因が重なり合うことによる専門学校教員という選択肢の浮上は、在学中から専門学校教員に『なる』ことを検討していた教員①のケースとも共通するものがある。

(2)-3「入職直前」に専門学校教員という選択肢が急遽浮上したケース

検討時期として最も多いのが、「入職直前」である。このケースに共通するのは、専門学校在学中から卒業後の長い期間において、専門学校教員に『なる』という選択肢はなく、入職直前に急遽、その選択肢が浮上するというものである。

例えば教員⑳は、入職（転職）直前に専門学校教員という職業を選択肢に入れた典型的なものであり、医療事務系専門学校卒業後、病院で医療事務の仕事に就いたものの、その１年後、母校に就職しているケースである。

教員⑳：勤務先で院長が退職するっていうことが（就職して）８カ月目ぐらいに起きたんです。
植上：大変なことですよね。
教員⑳：そうです。だから、ちょっとクビとか、必要性を感じなくなるのかなとか、思いはあったんですけど。（略）そのタイミングで先生から声がかかったっていうのが大きいですね。
植上：じゃあ前の職場が、ちょっと働きづらいような状況になってたっていうことですかね、基本的には。
教員⑳：ちょっとやりたいことじゃなくなってきていたなかで、先生という、また新しい職業をちょっと提示されて。

教員⑳のケースは、前職の会社の環境変化をきっかけに、他の職業への転職を検討しており、その期間に、タイミング良く母校から声がかかり、専門学校教員という選択肢が浮上している。教員㉒とも似ているが、教員㉒が、求人広告等を通じてもともと教職に対する興味関心を持っていたのに対し、教員⑳は教職に対する魅力を感じることがないまま、働きづらさからの回避という理由で、結果的に専門学校教員という職業が選ばれている。

同様に教員⑲も「教職」が選択肢として急浮上してきたケースとしてとらえることができる。教員⑲は、旅行系専門学校卒業後、3つのホテルで15年間、主にブライダルプランナーとして勤務し、退職後、募集を見つけて、現在の学校（非母校）に就職していた教員である。教員⑲は現職に対する不満というよりは、ライフキャリアにおける役割変化をふまえ検討した結果、専門学校教員への参入を決定している。

教員⑲：働いていた時に、●（現任校）の卒業生をずっと対応してきてますんで、まあすごくしっかりしているっていう印象ももともとあったっていうのが一つ。で、あと学校自体もすごく大きかったっていうのは二つ目。あと、もう一個は、今、△さんとか、他の学校も入ってきてるんですけど、そちらからもちょっとつながりがあったんですが、新しくオープンするところの大変さを経験してしまっていて。子育てをしながら、そこに情熱をどこまで注げられるかって考えたときに、経験をしてない職種なので、まあ自信がなかったっていうのがあって。で、いろんな状況を判断して、●で教員をするのがいいんじゃないかっていうふうに考えましたね。

以上の語りから、教員⑲は、職業人として専門学校生の卒業生と接してきた経験があり、入職先の専門学校の教育に対してもともとポジティブなイメージを持っていたことがわかる。そこに親として子育てに時間を割かなければならない状況が重なり、仕事にこれまでと同様の情熱を注ぐことが難しいという判断から、専門学校教員になるという選択肢が急浮上してきたのである。

(3) 小括

上記の検討から、1つ目の課題である「いつ、専門学校教員が具体的な職業の選択肢として検討されるようになったのか」については、以下のように整理

することができる。

1．専門学校に入学する前から専門学校教員に『なる』選択肢をもっていた教員はいない。
2．専門学校在学中に、専門学校教員に『なる』選択肢が形成されることはあるが、少数にとどまる。多くの場合、専門学校卒業後に選択肢が形成される。
3．卒業後のなかでも、特に入職直前に選択肢が急遽浮上することが多い。

次節では、本節で明らかになった専門学校教員への参入が選択肢として浮上する検討時期の違いをふまえつつ、さらに何が参入への後押しとなったのか、意思決定の要素を明らかにする。

4．専門学校教員に参入する上で後押しとなった意思決定の要素

(1) 意思決定の要素の概要

3章では、初等中等教育領域における教員とは異なり、「在学中」「卒業後」「入職直前」など、それぞれがキャリア形成上の異なる時期に専門学校教員への参入を検討している傾向を確認した。ではそれぞれの時期において専門学校教員は何を考え、どのように参入への決意を固めたのだろうか。本章では、2つ目の課題である「何が専門学校教員に『なる』うえで後押しになったのか」を検討するため、16名の語りから、専門学校教員に『なる』という意思決定に影響を与えたと考えられる要素の抽出を試みた。

要素抽出にあたって参考にしたのは、ドナルド・E・スーパーの「ライフキャリア・レインボー」の理論である。スーパー（1980）は、キャリアをイコール職業とは捉えず、キャリアを人生のある年齢や場面（ライフキャリア上）のさまざまな役割の組み合わせと定義しており、個人的決定要因（気づき、態度、興味関心、アチーブメント、適正、遺伝等）と、状況的決定要因（社会の組織

や状況、地域社会、学校、家庭等）の影響を受けながら、社会や家庭でさまざまな役割・経験を積み重ねるなかでキャリアが形成されていくと指摘している。今回のインタビュー調査を通じて得られた、専門学校教員への参入過程に関する語りを整理するなかでも、「職業人としての役割」や「親・家庭人・子ども（親の介護）としての役割」、「興味関心」「学校との関係」が意思決定に密接に絡んでいることから、この枠組みを援用し要素抽出を試みた。その結果をまとめたものが表４である。

＜表４　専門学校教員に『なる』意思決定を行う上での主な要素＞

調査番号	職業キャリア	ライフキャリア	教職への魅力度【業界維持の手段としての教員／教職への憧れ・興味】	専門学校との関係・接点の有無
①	前職なし（新卒で専門学校教員に参入）	初職の希望勤務地は東京だったが地方配属になり、親の面倒をみる必要があることから就職を取りやめ	【あり】 （実は、当時、私は、教師というものに対してあまりいいイメージがなかったんですね。 でも専門学校の先生をみてイメージは、ちょっと変わりましたね）	【母校採用・自分から働きかけ】 冗談半分に、「私、学校に残れませんかね」って言ったら、「それ本気？」とかって言って、「まあ半分は。教えるのも好きですし」って言ったら、「じゃあ、動いてみるか」みたいなかたちで、それで受けたみたいな
②	やりがいがあり、継続意向だった		【あり】 （大学に行きたいなと思って、でもそれは、先生になりたいなというのが夢であって、それは小学校の先生。今まで会った先生たちがみんな良かったんですよ。だから、「先生っていう職業もいいかも」みたいな思っていて、でもそれは、破れてしまったんです。大学には入れなかったんです。）	【母校採用・母校から働きかけ】 ３年だ、まだやるぞと思っていたところに、会社に電話がかかってきて、それが担任の先生だったんです。その担任の先生が、「３年だね」みたいな。「そろそろいいんじゃない」って言ってきて。
③	職場環境、人間関係に問題		【なし】 （、先生って、教えてもらって納得して「先生」って言われるもんであって、「先生は」なんて自分から言うのは、幼稚園と小学校までいいんじゃないかなんて思うんですね）	【職業を通じて非母校から働きかけ】 独立開業もいいかなっていうか。でも、せっかく声をかけられたからいいかなと。

⑦	異動先でスキルアップ見込めない		【あり】 （専門学校のときから、やっぱり教員になりたいなっていうのが少しあったんですよね。高校のときに、地理の先生がものすごく面白い先生で、その先生の授業、本当にわかりやすかったんですよ。）	【母校採用・母校からの働きかけ】 最終的に工場やってたんですけど、派遣だけじゃ、将来的に不安かなっていうのがあったので、派遣を辞めて、一応、そのとき、教員とかが全く求人とかも出てなかったので、ほとんど仕事違うとこに、分野に目を向けてたんですけど、たまたま電話がかかってきて。先生が１人辞めるからちょっとどうかなっていうので、戻ってこれたって感じなんです。
⑩	経営していたレストランを閉めて、ホテルのシェフに		【あり】 （自分で店やってたときに、年に１回特別講師でお世話になってたんです。さっきの階段教室で授業やったりとかもしてて。先生ともほかのことでいろいろお会いすることもあったりとかして交流があったので。たまたま欠員が出たので、ちょっとお知らせをいただいて。ただ、以前から興味は持ってたんです。人に教えるというか、教育をするということに）	【職業を通じて非母校から働きかけ】
⑪	異動先が合わず退職	妊娠出社を経て、子どもが３歳になり家計支えたい。 （やっぱり現場に戻りたいなって気持ちはあるのは事実です。ただ、現実的に難しいから、無理だなって。時短勤務もすることもできるんですけど、そうなると、かなりお給料も減りますし）	【なし】	【母校採用・自分から働きかけ】 子どもがやっぱり３歳とかになると、自分もちょっともう一回仕事、正社員で、フルタイムで働こうかなっていう気になってきてですね。そのときに思い出したんですよ、先生から電話かかってきたの。はっ、て思ってですね。でもやっぱり子どもの時間に合わせるとなると、夕方上がれる仕事じゃないとっていうのもありましたし、夜遅くまでは働けないからですね。では学校っていいんじゃないかなって。

⑫	職場環境、人間関係に問題		【なし】	【母校採用・母校からの働きかけ】 次の仕事を探してたら、ちょうど最後の出勤日の前日に学校から電話かかってきて、出たら、元担任の先生からで…（中略）…もうこれは運命やねみたいな。話があるから、ちょっと時間作ってよって言われて。
⑮	業界は好きで、関われる仕事につきたい	病気になった母を支えたい、結婚などの将来や学歴から考えると非常に安定的な職業で女性が働くうえでも非常にいい。	【なし】	【なし】 業界は好きだったので、関われる仕事につきたいと思い、求人を探していたところ現在の勤務校に出会う。
⑯	契約社員という雇用形態への不安		【なし】	【母校採用・母校から働きかけ】 計３回、教員就職の声がかかり、以前から誘いがあった母校に就職
⑰	ホテル業界には関わり続けたい	子育てをしながらでも働きたい	なし （むしろ現場に戻りたいなっていう気持ちが強い）	【職業を通じて非母校から働きかけ】 ダブルワークとして非常勤で授業を担当しており、そこで正職員に誘われる
⑲	業界は好きだが、顧客が求めるサービスの質にコミットできない。	子育てと仕事の両立。仕事を最優先にできない葛藤。	【なし】 現状で業界に携わる方法として専門学校の学生の育成に興味。	【なし】 退職後、募集を見つけて、現在の学校（非母校）に就職。
⑳	勤務先で、医療事務職から雑用に回された		【あり】 （元担任から声をかけてもらい「興味はあったので」という気持ちで）	【母校採用・母校から働きかけ】 新卒就職後も、２月に１回ぐらい、元担任と会っていた。
㉑	職場は楽しい。副主任への誘い。		【なし】 （「新人を育てたいっていう気持ちから、じゃあその前から育てられるんじゃないか」という思いで）	【母校採用・母校から働きかけ】 誘われたタイミングがちょうどよかった。

㉒	定時に終わる仕事に対する物足りなさ。もっと働きたい。あり		【なし】 （現場経験生かすこと、医療事務の仕事だけじゃなくて、医療事務を生かした教員っていう仕事もあるよっていう話から急に専門学校の先生になりたいと）	【母校採用・自分から働きかけ】 たまたま専門学校教員の求人を見つけて、専門学校教員と相談
㉓	与えられている裁量も大きく、楽しく働いていた	地元は出たくはなかった	【あり】 （先生になりたいから呼んでくださいねみたいな話をずっとしてた）	【母校採用・母校から働きかけ】
㉔	東京で働いていたが、異動で地方に行くことに	3.11 の経験もあり沖縄に帰りたい気持ちがあった	【なし】 （沖縄に帰ってくるというのが前提で、面接をさせていただいて、何となくそのまま。）	【母校採用・自分から働きかけ】 （専門学校の担任の先生がまだいたので連絡をして、今、卒業生向けで求人きてますかっていうことで連絡をして。で、その中で、うち募集してるよっていうことで）

表４の整理から見えてきたのは、「職業キャリア」、「ライフキャリア」「教職への魅力度【業界維持の手段としての教員／教職への憧れ・興味】」、「専門学校との関係・接点の有無」の４つの要素である。これらはそれぞれ独立しているわけではなく、複合的に絡み合いながら、専門学校教員という選択肢の浮上や最終的な入職に関する意思決定に影響を与えている。以下では、抽出した各要素について特徴的な語りを紹介しながら、それぞれの典型的なケースを検討していく。

(2) 意思決定の要素に関するケースの検討

(2)-1「職業キャリア」に関する語り

職業キャリアを理由とした意志決定については、新卒での入職である教員①を除き、ほぼすべてのケースで言及があった。この中には、教員②や教員㉒など前職にやりがいを感じていたケースもあるが、他方で前職の環境や待遇への不満や将来への不安などが語られたケースも比較的多く見られた。例えば教

員⑦は自動車整備系専門学校卒業後、民間企業で整備士（5年）と自動車工場（1年）での勤務を経て、母校に就職した教員であるが、離職に至った前職の異動タイミングにおけるキャリア不安について、以下のように語っている。

教員⑦：専門学校のときも、ある程度学んだら、専門学校とかで教員の職に就きたいなっていうのがあったんです。どうしても、検定が取れたっていう一区切りと、このとき、少しレース活動というか、会社の中のレース活動に入ってて、その区切りが着いたタイミングだったので辞めたんですがね（笑）。

…中略…

外部の方には、あんまり宣伝は大っぴらにしてない、●カップっていうのがあってですね。●だけを使ったレースがあって、それは、■の会社の人しか出れない全国大会なんですが、この大会が終わった時にある程度、燃え尽きじゃないですけど、そこで満足をしてしまった、っていうところですね。あとは、××で5年働いていて、その中での整備士としてのキャリアがある程度きてたので、例えば、5年目の人ができる作業とか、2年目の人ができる作業っていうのがあるんですけど、異動したところではベテランの方が多かったので、私が年次で言うと5年目なんですけど、その中で言うと下から2番目とかになるんですよ。なので、××のときに、2年目にやってたような仕事を、また5年目になってそれをやるっていう。自分の中で成長、これから頑張って上げていこうっていうときに、また3年前に逆戻りしてしまうっていうのもあったので、これだともう、多分ここにいても、もう伸びることはないな、で、一区切りついたし、一度辞めて、リセットしてみようかっていうので。

教員⑦はもともと専門学校在学時から専門学校教員になることを検討してい

た点が特徴的ではあるものの、「多分ここにいても、もう伸びることはないな」という発言にあるように、異動先で十分な能力向上の機会が見込めないことが、専門学校教員に「なる」ことを最終的に判断する上で重要な要素になっていた可能性がある。

また、自身の専門性を十分に生かすことのできない、いわゆる「ミスマッチ」の環境が、専門学校教員への転身を促した例もある。この点について、一部、前章（2）-3と重複するが、医療事務職として働いていた教員⑳の語りを見てみよう。

植上：それで、先生の場合は医療事務に入られたってことなんですけど、1年で専門学校のほうに戻られるというか、かたちになってるんですけど、こちらの理由っていうのはどういうことになるんでしょう。前職を離れた理由ですよね。

教員⑳：一応、もともと担任だった先生に、ふたつきに1回ぐらいは会いに来てたんですね。

植上：そんなに。

教員⑳：そのときには、実は言ってなかったんですけど、勤務先で院長が退職するっていうことが8カ月目ぐらいに起きたんです。

植上：大変なことですよね。

教員⑳：そうです。だから、ちょっとクビとか、必要性を感じなくなるのかなとか、思いはあったんですけど。ちょっと老健施設とうちの医療機関は併設だったので、そこで雑用していた期間が4カ月ぐらいあるんですよ。そのタイミングで先生から声がかかったっていうのがおっきいですね。

このように、職場の院長が自身の入職後わずか8か月で退職するという出来事によって、専門性を活かすことのできない「雑用」に従事せざるをえない状

況となり、「クビとか、必要性を感じなくなる」ことへの現実的な危機感が専門学校教員への転身を促している。教員⑦のケースも教員⑳のケースも、前職の環境が、専門学校教員へと参入していくプッシュ要因となったといえるであろう。

(2)-2「ライフキャリア」に関する語り

ライフキャリアについて明確な言及があったのは7ケースと、「職業キャリア」への言及と比較してそれほど多くはない。しかしながら、いずれのケースも専門学校教員への入職に大きな影響を与えている。

ライフキャリアに関してとりわけ特徴的であったのは、子育てや介護に関する語りである。例えば教員⑪は結婚・妊娠をきっかけに前職を退職しているが、その後、子育てと両立していける仕事を探すなかで、卒業後に母校の教員から声掛けがあったことを思い出し、専門学校教員となることを決めている。

教員⑪：（直前の仕事の勤続年数は―筆者注）1年ですね、結局。その間に結婚して、ちょうど妊娠をしたんですよ。辞めようかなって。それにしてもタイミングよかったなみたいな、思って。産休取るかどうしようかって思ったけど、産休取ってまた戻ってきたいと思えなくですね。もう意を決して、10年たつし、自分の中でもやりきったなっていうふうに思ってたのでですね。なのでもう退職を。

教員⑪：まだ3歳ぐらいまでは全然、もうべったりじゃないですか。なので、あまりそこまでは思わなかったんですけれども、福岡で勤めてるときに、私の学校の先生とたまたま遭遇したんですよ。勤めてるときに。頑張ってるのね、みたいな。はい、頑張ってますみたいな話をして、それっきりだったんですけど。で、子育て中に、まだ子どもが赤ちゃんだった頃に、辞めたあと

に電話が先生からかかってきて。それがきっかけなんですけど、今の○○（現任校）に勤める。で、今ちょっとまだ子ども子育て中なんですよみたいな。仕事はちょっと今のところ考えてないですっていうお話をしてて、言われたんですけど、全然自分の中で封印っていうかもうやりきったって思ってるから、またやりたいなとは思ってなかったです、正直。

教員⑪：福岡に戻るのプラス子どもがやっぱり３歳とかになると、自分もちょっともう一回仕事、正社員で、フルタイムで働こうかなっていう気になってきてですね。そのときに思い出したんですよ、先生から電話かかってきたの。はっ、て思ってですね。でもやっぱり子どもの時間に合わせるとなると、夕方上がれる仕事じゃないとっていうのもありましたし、夜遅くまでは働けないからですね。では学校っていいんじゃないかなって。

教員⑪：何でもよかったです、基本。本当にフルタイムっていうか。夕方に、９時５時ぐらいでとかって思ってたんですよ、条件を。子どもにもう主軸を合わせて、何か自分ができることはって考えたときに、先生からお誘いあったこと思い出したんですよね。

このように教員⑪は、子育ての都合に合わせながら柔軟に働けることを第一優先に考えている中で専門学校教員という仕事が選択肢に浮上し、その条件を満たしうることから入職に至っている。それは母校であるがゆえに、実際に子育てをしながら働いている教員が在籍していることを事前に把握していたという事情もあるだろう。詳細は割愛するが、性別で検討時期を確認したところ、男性と比べ、女性において圧倒的に「入職直前」に専門学校教員への参入を検討したものが多く、ライフキャリア上の「親役割」を担いながら、同時に「職業人としての役割」を担っていく上で、専門学校教員という職業は特に女性に

おいて有用であると言えそうだ。

ライフキャリアに関してはこの他に、自分自身の生活環境の維持を最優先に、通勤距離や給与などの諸条件を勘案したうえで専門学校教員になることを決めたケースも見られた。ここでは、動物系専門学校卒業後、ホームセンターでペット部門勤務（2年）し、その後母校からの誘いを受けて助手として就職のち正規教員となった教員㉓の語りを見てみよう。

教員㉓：専門学校に入ったら、海の安全管理とか人が少なくなるからっていうかたちで、あと授業も持ってほしいからねって聞いて。最初はこのぐらいの金額ですよという給料も提示されて。一応2年働いて、ある程度生活するのにどれぐらいかかるかとかがやっとわかってきて。すいません、●先生、これだったら多分、僕、××にまた通勤になるのでただ引っ越しとする気もなくて。△△に住んでたんですけど、△△を出たくなかったので、ガソリン代とかいろいろ考えると、ちょっとぱつぱつですねっていうことで。じゃあ、ちょっと考えますみたいな感じで保留にして。1週間後ぐらいにいろいろ通勤とか、あとは金額の面でも生活ができないかもしれないので、ちょっと厳しいですって言って一回断りの電話を入れて。●先生が「わかった」っていうことで。そしたら2週間後ぐらいに、また電話がかかってきまして。「どうしたんですか」って言ったら、「とりあえず給料どうにかならないかって上にかけ合ってみた」と。そしてちょっとだけ上げてもらえることになったよっていう話があって。

教員㉓：新しい金額を提示してもらって。これだったらぎりぎりいけそうですっていうことで。で、おまえ以外には誰も声かけてないからなって言われて。そこまで信用されて呼ばれているなら、いくしかないなと思って。お世話になった担任でもありますし。

以上の「△△を出たくなかったので、ガソリン代とかいろいろ考えると、ちょっとぱつぱつですねっていうことで。」といった言葉にあるように、教員㉓は職業というよりは自身がどこでどう生きていきたいかを優先順位の上位に位置づけており、実際に、自分が慣れ親しんだ生活を手放してまで、専門学校教員になることを希望しておらず、実際に一度は断りの連絡を入れている。ただ、条件が希望に沿う形で改善されたことで参入を決めることとなった。つまり専門学校教員になることを決めたのはあくまで条件がそろったからであり、その職業につくこと自体の優先度はそれなりに高かったものの、必ずしも第一優先ではなかったことがうかがえる。

(2)-3 専門学校教員への接近理由に関する語り（業界維持／教職への憧れ等）

ここまで見てきたように「職業キャリア」や「ライフキャリア」は、専門学校教員に『なる』にあたり重要な要素であるが、とりわけ専門学校教員という職業への参入において特徴的なのは、「教える」という営みに関心を持っていたケースである。例えば教員⑲は、旅行系専門学校卒業後、3つのホテルで主にブライダルプランナーとして勤務（それぞれ5年、3年、7年勤務）し、退職後、募集を見つけて現在の学校（非母校）に就職している。その決定にあたっては、これまでの業界の延長線上に「後進の育成」という働き方を見出し、その具体的な職業として専門学校教員という職業が選択されている。

教員⑲：2015年に子どもを出産したんですね。もうそれは大きいターニングポイントだったなあっていうふうに思っています。で、仕事を第一線でやってるときには、仕事を本当に一番に、優先に働いてきたんですけど、やはり子どもっていう存在ができたときに、優先順位が変わってしまって。で、そうなったときに、まあお客様にとって自分がやりたいサービスをしてあげられないというか、残ってここまでやってあげられないとかっていうギャップ

と、あとは、会社側、沖縄がそういう子育てに対しての制度は、正直言うと整っていないところもまだまだだと思う。なので、その中で子育てをしながら仕事をしていく難しさっていうのをすごく感じていて、それが本当に、もうポイントになっている。

植上：ちょっともう、限界もあるなっていうふうに感じられてってことで。それで、いくつか選択肢はあると思うんですけど、今の仕事は辞めるっていうふうに考えて、違う、いくつかの選択肢がある中で、専門学校教員、選ばれたのはどういう理由だったんですか。

教員⑲：ただ、やっぱり仕事は嫌いになってるわけでは、全くなくて、ブライダル業界っていうの本当に、今でも好きな業界で、やりがいもあって。まあ自分が、お客様に一番いいサービスを提供してあげられない存在に今、ちょっとなっているっていうところで、自分ができることは何かっていうのを考えたときに、これからの業界で活躍していく人たちを増やしていくことは、自分の業界に携わる方法かなあとかっていうふうに考えて。それで、何をしよう？って考えたときに、専門学校の育成とか、学生の育成とかどうかな？っていうふうに考え始めて。

以上の語りから、教員⑲は子育ての開始を契機に、前職をそのまま続けることに難しさを感じつつも、一方で好きな業界での仕事を継続したいと考えていた。そしてそれが「これからの業界で活躍していく人たちを増やしていく」ことによって可能であると考え、専門学校教員への転身を決意している。「自分のやりたいサービスをしてあげられない」という語りは、サービスの水準を下げてまで、今の仕事に固執してはいけないという職業に対する高い意識に由来するものであろう。初等中等教育の学校教員においては、こうした「業界との接点維持」という形で教員になるというケースは少なく（大学教員など別の教職を目指しながら、最終的に別の学校種の教員になるというケースは存在する

かもしれないが)、差異として興味深い。

また、「教える」という営みへの関心から専門学校教員への転職を考えたケースもある。(2)-1で取り上げた教員⑦は、高校時代に出会った教員への憧れから教師という仕事への関心を持っており、それゆえ専門学校に在籍していた当時から「教える立場につきたい」と考えていたという。教員⑦の語りを見てみよう。

植上：専門学校の時代から、ある程度、専門学校の先生になるってことは、ちょっとイメージされてたってことなんですか。

教員⑦：そうですね。教える立場になりたいっていうのがあったので、なんで、会社の中にも教育する部署があるんですよ、エンジニアをですね。なので、会社の中に入ってるときは、そこにもいってみたいなとは思ってたんですけど、学生のときは知らないので、ある程度何年かしたら。で、私たちの学校は、卒業生が大体何年かしたら、先生が抜けるタイミングで戻ってくるっていうのがわかってたので、それ、わかってたので、何年かして。で、成績も結構いいとこ取れてたので、ちょっと声かけてほしいなっていうのが(笑)

植上：でも、整備士になりたくて入られたわけですよね。でも整備士っていう仕事と、専門学校の教員って、もちろん重なるんですけど、違う部分もあるわけじゃないですか。その中で、専門学校の先生になりたいっていうふうに学校時代に思ってたのは、どうしてなんですか。

教員⑦：学校の先生が、ディーラー出身の先生が多かったので、ある程度、その先生でも教えることができるよっていうのがわかったのと、教員なんですけど、教員らしくないというか（笑)。

植上：なるほど、整備士っぽいって。

教員⑦：はい、整備士っぽいっていうんですかね、立ち位置的にですね。な

ので、これだったら、ものすごくしっかりしたところで教育を受けてから戻ってくるとかじゃなくても、ある程度通用が、会社の中で勉強ができてれば、通用ができるのかなっていうのが少しあったので。

このように教員⑦は、専門学校在学時「卒業生が大体何年かしたら、先生が抜けるタイミングで戻ってくる」という入職のかたちを目にしていたこともあり、自身の「教える」ことへの関心を具体化するにあたって、（母校の）専門学校教員というルートを比較的想定しやすかったと推察される。こうしたかたちでの入職ルートは、初等中等学校とは異なり教員免許が必須では専門学校ならではのものだといえるであろう。

(2)-4 母校との関係性・距離感に関する語り

最後に母校との関係性や距離感による参入について取り上げる。これは、本稿で対象としている専門学校卒教員の入職経路の大きな特徴と言える。ここではまず、先ほど (2)-2 で見た教員㉓の語りを再度取り挙げたい。教員㉓は地元で暮らすことを重視しており、専門学校教員になる上での条件が希望通りに緩和された結果、最終的に入職するという決断をしているが、そもそも在学中から専門学校教員になりたい意向を学校側に伝えており、学校から必要なタイミングで声をかけてもらえる関係性を構築していた点が大きい。

教員㉓：いきなり電話がきて、1年次の担任から。このときの、専門学校の時代の1年次の担任は●先生っていう方がいたんですけど、その先生から電話がきて、「教員㉓（名前）」みたいな感じで、「先生になりたいって言ってたよな」っていうことで。僕、ペット、在学中に先生がみんな楽しそうだったので、「先生、俺も先生になりたいから、呼んでくださいね」みたいな話をずっとしてたんですね。半分ノリ、半分本気みたいな感じで話してたので、

職員になりたがってたよなみたいな感じで話がきて。

以上の語りをみると、「半分ノリ、半分本気」といった言葉にもあるように、教員㉓としてはそこまで深刻な意思表明ではなかったかもしれない。ただし、当時担任だった教員が学生のニーズをきちんと記憶しており、学校側からの働きかけがあったことで、教員㉓に専門学校教員になるという選択肢が浮上し、最終的な入職に至っている。こうした過去の担任―学生というかなり個別で俗人的な関係の中で、マッチングが行われている点も、専門学校教員への参入過程を説明する上での特徴の１つであろう。

その他、ビジネス系専門学校卒業後、複数の仕事を経て母校の教員になり、その後、転職して現在の学校（非母校）で先生になった教員㉔のケースを見てみたい。教員㉔の場合、東日本大震災をきっかけに地元に帰りたいと思うようになり、地元にどのような求人があるかを尋ねる目的で母校とコンタクトを取ったところ、急遽、専門学校教員という選択肢が浮上している。

教員㉔：2011 年に、3 月に震災が、東日本大震災がありまして、そのタイミングでちょっと仕事も続けてたんですが、もう帰ろうかなっていう気持ちになって、帰るタイミングで、そのときの専門学校の担任の先生がまだいたので連絡をして、帰るけど求人ありますかって、ああ、僕はこのときは何か仕事ありますか、学校の仕事っていうニュアンスではなかったんですけど、今、卒業生向けで求人きてますかっていうことで連絡をして。で、その中で、うち募集してるよっていうことで、履歴書送ってってなったので送って、帰ってきて、面接をさせていただいて、何となくそのまま。特にこの仕事しようっていうのは決めてはいなかったので、そのときは。

以上のような教員㉓、㉔のケースから読み取れる特徴は、専門学校卒教員自

身が、何らかの形で卒業後も母校との関係を維持していたことが、その後の就職につながっている、という点である。関係の維持といっても、いずれのケースも高頻度で連絡を取り合っているわけではない。転職のタイミングや学校の新規採用のタイミングでコンタクトを取り合う関係性ではあるが、その関係性があることで、卒業生と学校教員が専門学校教員になることのメリットやニーズをすり合わせながら、最終的に第一希望でなかった、あるいはそもそも選択肢になかった専門学校教員という選択肢を急浮上させ、最終的に就職するに至っている。こうした職業マッチングの特徴や、キャリア決定までの緩やかな相互作用と偶発性は専門学校教員の参入過程の１つの特徴と言えるだろう。

(3) 小括

上記の検討から、2つ目の課題である「何が専門学校教員に『なる』上で後押しになったのか」については、以下のように整理することができる。

1．共通項として、就職・転職等の状況において専門学校教員という仕事はほぼ第一選択肢としては挙げられていない。

2．参入の後押しになった要素として、職業キャリアの面では「職場環境とのミスマッチ」「個人の能力開発」「異動などを伴う環境変化」「雇用形態の不安」などが、ライフキャリアの面では、「子育てと仕事の両立」「親の介護と仕事の両立」「地元に留まり生活したい」などが確認され、それらが1つないしは複数絡み合いながら、総合的な判断の結果、教員への入職を検討しているケースが多い。

3．「教える」という営みへの魅力という点について、在学中から教職に魅力を感じていた者もいるが、必ずしも多数派ではない。むしろ学生時時代に

は教職に全く魅力がなかった、ないしはネガティブな印象を持っていた者も存在する。教職に魅力を感じている者をみてみると、専門学校教員に対して魅力を感じていた者もいれば、高校以前の段階で教職に関心を持っていた者も存在した。

4．関係性に濃淡はあるが、専門学校教員の多くは、卒業後も母校と何らかの関係をゆるやかに維持しており、それらのつながりが、さまざまな転職タイミングにおいて専門学校教員という選択肢を浮上させる重要な役割を担っている。

5．まとめ

最後に、専門学校教員に『なる』という選択肢として浮上した時期および、どのように専門学校教員として参入するまでに至ったのか意思決定の要因に関する分析結果を通じて明らかになった専門学校教員の参入過程に関する総合的な考察と残課題をまとめる。

まず専門学校教員の参入過程の特徴として見えてきたのは、専門学校教員への参入における、教員と専門学校間の緩やかな関係性の中で参入が決定していく、という特徴である。教員の中には、学生時代から教職に憧れをもち参入を決めた者もごく少数存在するが、多くは第一希望ではなく、入職直前まで就職の選択肢として持ち合わせていなかった者である。そうした中、母校を中心とした専門学校から様々な情報提供を受ける中で、次第に専門学校教員という職業を知り、徐々に興味を持つなかで接近していく。こういった専門学校教員の参入前の状況と学校の状況が重なりあう中で、偶発性を伴いながら参入が決定していくという過程は、初等中等教育段階のような明確に定義された教員養成課程を経て、教員に必要な知識やスキル、経験を積み重ねながら教員に『なる』過程とは大きく異なるものである。こうした専門学校教員に『なる』選択肢の

浮上の仕方は、ドラマチックでないものの、1つの特徴として捉えることができるだろう。

最後に本稿では十分に検討することできなかった課題に触れておきたい。残課題としての1点目は、今回明らかにした専門学校教員の参入過程の特徴は、あくまで今回実施した質的調査の範囲に基づく仮説的な解釈にとどまる、という点である。今後は、量的調査等で、専門学校教員の参入実態の全体像を捉えていくなかで、今回提示した観点や要素で参入時期や意思決定を適切に捉えられるかを確認していく必要がある。

もう1つは、今回の分析対象が「専門学校卒教員」に限定されており、「大卒」の学歴を含む専門学校教員は含まれておらず、専門学校教員の参入過程の全体像を捉えているわけではない、という課題である。同じ観点で分析しても、「非専門学校卒教員」からは異なる参入時期や意思決定の要素が出現する可能性があり、今後の研究課題としてさらなる知見の蓄積を試みたい。

参考文献

文部科学省（2023）「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について（諮問）【概要】」令和5年9月25日中央教育審議会.

三菱総合研究所（2020）「専修学校と地域の連携深化による職業教育魅力発信力強化事業」.

三菱総合研究所（2023）「職業教育のマネジメント充実のための実態調査事業報告書」.

文部科学省（2019）「学校教員統計調査（令和元年）」、教員個人調査.

高等教育と学位・資格研究会（2012）『高等教育における教員と教育組織に関する調査』.

植上一希・佐藤昭宏・丹田桂太（2023）「専門学校教員の参入前キャリアの検討：学歴・職歴に焦点を当てて―」，福岡大学人文論叢，55，1，1-28.

植上一希・瀧本知加（2017）「専門学校教員研究における方法の検討」，産業教育学研究，47，2.

中山博夫（2007）「教職課程履修学生の志望意識の変容に関する事例研究：教職課程受

講と教育実習での体験に着目して」，目白大学総合科学研究 3，83-93.

国眼真理子・松下美知子（2000），進路の選択と決定に関する研究（8），日本教育心理学会総会発表論文集，42，16.

国眼真理子・松下美知子（2000），進路の選択と決定に関する研究（9），日本教育心理学会総会発表論文集，42，17.

Edgar h. Schein（1978）, Career Dynamics: Matching Individual and Organizational Needs.

Dean, R. A., Ferris, K. R., & Konstans, C.（1988）. Occupational reality shock and organizational commitment: Evidence from the accounting profession. AccountingOrganizations and Society, 13, 235-250.

Super, D. E.（1980）. A life-span, life-space approach to career Development. Journal of Vocational Behavior, 13, 282-298.